

書誌から見た昭和時代（戦前）のワイ  
ルド受容——本間久雄、大塚保治、益  
田道三を中心に——

佐々木 隆

2005年4月

日欧比較文化研究 第3号

日欧比較文化研究会

## 書誌から見た昭和時代（戦前）のワイルド受容 ——本間久雄、大塚保治、益田道三を中心に——

佐々木 隆

### プロローグ

昭和時代（1926年12月25日～1989年1月7日）は第2次世界大戦を境に大きく変貌する。ここでは終戦までの昭和20年（1945）8月15日までを昭和戦前時代として取り上げる。

昭和戦前のワイルド受容は、特に研究の分野で大きな業績が登場した。本間久雄（1886 - 1981）と大塚保治（1868-1931）のように明治以来の研究成果を発表するなど、大きな業績を世に輩出することになった。本間久雄はこれまでのワイルド研究の成果をまとめて昭和9年（1934）に『英国近世唯美主義の研究』（東京堂）を出版した。明治以来日本の美学者として大学の教壇に立ち、その講義でワイルドやボードレールを論じた大塚保治の講義録が昭和11年（1936）に『大塚博士講義集』（第2巻）（岩波書店）として出版された。昭和16年（1941）には益田道三『近代唯美思潮研究』（昭森社）も唯美思潮を社会現象として捉えた研究書である。ワイルド研究の大きなピークがこの昭和戦前期に到来したのである。日本におけるワイルド研究を大きな視点でとらえると、「明治後期から昭和戦前」、「戦後から昭和50年（1975）以前」、「昭和50年（1975）以降から現在まで」の3段階に大別される。特に、本間久雄は研究者個人としての業績もさることながら、彼の影響や指導を受けた研究者が後年、日本のワイルド研究の中心となっていることは見逃せない点である。本稿では昭和戦前のワイルド研究書のうち、『英国近世唯美主義の研究』、『大塚博士講義集』（第2巻）、『近代唯美思潮研究』について特に触れるものである。

## 1 本間久雄『英国近世唯美主義の研究』

本間久雄は明治42年(1909)の『文章世界』(第5巻第4号)で「人生も自然も芸術の模倣也」を掲載し、ワイルドを論じて以来、明治44年(1911)3月の『早稲田文学』(第64号)の「オスカア・ワイルド論」を経て、その後もワイルド論を次々と発表し、大正12年(1923)には『唯美主義者 オスカア・ワイルド』(春秋社)を発表した。その後、昭和2年(1927)の『欧洲近代文芸思潮概論』(早稲田大学出版部)、昭和4年(1929)の『滞欧印象記』(東京堂)、昭和6年(1931)の『文学論攷』(東京堂)、昭和9年(1934)の『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)、昭和13年(1938)の『文学襍記』(人文書院)へと出版は続く。また、戦後の大きな業績として一連の『明治文学史』(岩波書店)もある。

本間のワイルド研究最大の業績は『英国近世唯美主義の研究』(東京堂)である。本書は本間の博士論文であり、限定500部の出版であった。構成は7つの章と参考書目から成り立っている。内容的には「第1章 唯美派」「第2章 唯美派の経路及び要素」「第3章 唯美派の様相」までが唯美主義全体に関する考察であり、「第4章 オスカア・ワイルド」「第5章 唯美主義芸術観」「第6章 唯美主義と日本」「第7章 唯美主義の衰頹」はおもにワイルドを論じ、最後に「参考書目の事」が設けられた。

本間が『英国近世唯美主義の研究』で力点を置いたのは、「唯美派の運動をどこ迄も一個の社会的現象として観察しようとしたこと」と「この運動の要素——而も重大な要素の一つになってゐる『日本的なもの』を検討し、解説しようとしたこと」の2点である。<sup>(1)</sup>本間はこの運動の中心要素を「中世趣味」「生活美化」「異国趣味」の3点に要約し、この3つが如何に作用し合っているかを、ロセッティ、モリス、ホイッスラーを代表として説明したのである。本間はワイルド、エレン・ケイ、ペイタア、モリス、シ

ェイクスピアなどを研究しているが、これは大きな視点から見れば「芸術と人生」のあり方を、時代を通して考察したことになる。

『英国近世唯美主義の研究』の「序」の中には

十九世紀の後半のイギリス文学の異色である唯美派の運動は、これを研究の対象とする時、さまざまな意味で多くの興味をそそる。この運動が単に文学上、芸術上の運動であるにとどまらず、ひろく人生観上の、或は實際生活上の運動であつたこともその一つである<sup>(2)</sup>

と、明言している。『英国近世唯美主義の研究』の執筆にあたり、ヨーロッパ留学が大きく関係していることは言うまでもない。

本書を——殊に第三章『唯美派の様相』以下を草するに當って、文献的材料の上で、稿者の私かに意を強うしたことは、かの浩漭な『ワイルド書目史』の著書スチュアート、メエソンが数十年に亘つて蒐集した参考資料を、稿者が数年前渡英した折に、或る幸運の機会に、図らずも手に入れたといふことと、今一つは、現行本の『ディ・プロファンディス』に漏れてゐるワイルド獄中手記の全部——現に大英博物館の保管にかかり、閲読禁止となつてゐる部分——所謂禁止本獄中を、ワイルドの遺子ホランド氏の好意で、これも稿者滞英中、全部手写して来たといふことである。蓋し、これらの材料は、唯美派運動、取り分けワイルド再認識の上に、稿者に取つて甚だ重要なものであつた。<sup>(3)</sup>

本間は「第4章 オスカア・ワイルド」以降でワイルドを本格的に論じている。第4章では、ワイルドが唯美主義へ傾倒していく

過程を、ワイルドの大学生時代とアメリカ講演を中心に論じている。ラスキンからの影響については、1882年（明治15）のアメリカ講演の“Art and the Handicraftsman”で街路工事についてのワイルド自身の追憶を引用しながら、ロバート・シェラードの *The Life of Oscar Wilde* とは別の立場をとる E. T. クックの *Studies in Ruskin* (1890) やウォルター・ハミルトンの *The Aestheticism Movement in England* (1882) を取り上げ、ワイルドの初期の芸術観に影響を認めている。また、*De Profundis* でもワイルドの人生転機としてオックスフォード大学が言及されているが、ペイターとの出会いとギリシャ遍歴が大きな影響を与えたものとして取り上げた。これまでもワイルドへのペイターの影響についてはよく論じられていたが、ギリシャ遍歴に伴ったマハフィ教授や詩「ラヴェンナ」については大きくは論じられてこなかったが、本間の豊富な資料が、ワイルド像をより鮮明に浮き彫りにしたものとして考えられる。大学卒業後のワイルドについては、「審美的服装」について触れ、ノルダウの *Degeneration* のワイルドについても引用している。「第7章 唯美主義の衰退」は「第1節 ワイルド下獄誌」「第2節 『ディ・プロファンディス』考」となっており、本間が『ディ・プロファンディス』に大きな関心を寄せていたことがわかる。本間は文学批評においては多くの論文を書いているが、戯曲はそれに比べると少ない傾向にある。ワイルド劇についても同様であるが、日本におけるワイルド劇上演は、大正期に大きなピークを迎え、本間も大正2年(1913)に『『サロメ』と『秋夕夢』』（『近代』創刊号）、大正3年(1914)に『『先代萩』と『サロメ』』（『演芸画報』第8年第1号）など、『サロメ』の劇評なども寄せているが、ワイルドの戯曲の演劇研究については決して充分とは言えない。本間が恩師の島村抱月の率いる芸術座と深いかわりを持っていたことを考えると、今後さらに研究の余地がありそう

だ。しかし、いずれにせよ、ワイルド劇研究については、現在に至るまで日本におけるワイルド研究の大きな課題と言えるだろう。本間のワイルド研究については、平成10年(1999)の清水義和『ショー・シェークスピア・ワイルド移入史』(文化書房博文社)がよい参考となる。なお、本間がヨーロッパ留学中に入手したシュアート・メイソン編集によるワイルド・コレクションは現在実践女子大学図書館に所蔵されている。ワイルド・コレクションについては、昭和4年(1929)の本間久雄「ワイルド研究資料蒐集について」(『滞欧印象記』東京堂)、平成元年(1989)の『実践女子大学図書館所蔵 オスカー・ワイルド文献目録』(実践女子大学図書館所)がよい参考となろう。

## 2 大塚保治『大塚博士講義集』(第2巻)

大塚保治の講義録は昭和8年(1933)に大西克礼編『大塚博士講義集』(第1巻, 岩波書店)、昭和11年(1936)に大西克礼編『大塚博士講義集』(第2巻, 岩波書店)として出版された。大塚保治は明治元年(1868)に群馬県の小屋右兵衛の弟として生れ、明治25年(1892)に早稲田で美学・美術史を担当し、同じ年に森林太郎は慶應義塾で審美学の講義を始めた。明治28年(1895)に大塚正男の養子となった。明治29年(1896)から約4年間、ヨーロッパに留学し、帰国後は東京帝国大学教授となり、美学講座を担当した。明治34年(1901)には文学博士の学位を授けられた。大塚は大正4年(1915)9月から大正8年(1919)7月まで、東京帝国大学での文芸思潮論の講義でボードレールとワイルドに絞って講義を行った。『大塚博士講義集』は一連の講義をまとめて、大塚が亡くなってから出版されたものである。第1巻は「美学及芸術論」と「造形美術論」が収録され、第2巻は「文芸思潮論」が収録された。「文芸思潮論」は、「唯美主義の思潮前篇」「唯美主義の思潮後篇」「象

徴主義の思潮」「附録」とさらに分かれている。大塚は「序説」でボードレールやゲーテとワイルドを比較しながら、

ワイルドに於ては美的な方面だけが著しく発展し、他の方面は殆ど缺けてをる。彼は大芸術家・大詩人であるとは言へないが、美的方面を純粹に發揮する點に於て唯美主義の最もよき代表者と見られるのである<sup>(4)</sup>

と、ワイルドを材料に唯美主義の本質を研究すると同時に、唯美主義の原理によってワイルドについても研究できるというものである。「唯美主義の思潮 前篇」ではおもにボードレール、「唯美主義の思潮 後篇」ではワイルド、「象徴主義の思潮」ではヴェルレーヌを論じた。

唯美主義は美を実生活との芸術との両方面に發揮することに務めるものであるが、この思想の最もよき代表はオスカー＝ワイルドである。<sup>(5)</sup>

「唯美主義の思潮 後篇」では「序説」に続き3つの章から成っている。「第1章 ワイルドの生涯」はシェラードやランサムのワイルド伝を基調としている。ラスキンとペイターについては「学問や文章や思想の上に多くの感化を受けた」<sup>(6)</sup>としながらも、「ラスキンやペイターは唯美主義の運動を誘導した有力な人物」<sup>(7)</sup>であり、唯美主義の「開展に対して外部から刺戟と機会を與へたに過ぎない」<sup>(8)</sup>としている。「第2章 ワイルドの人格」では、ワイルドの美に対する熱情を呼び起こしたのは、1877年(明治10)のイタリア、ギリシャ旅行であったと指摘し、「第3章 ワイルドの作品」では、大塚は作品を個別に論評を加えている。詩につ

いては「ワイルドの長所でなく、又、多くは青年時の作で、価値の少いものである」<sup>(9)</sup>とし、続いて

「意向」「ディー＝プロファディス」等のワイルド独特の作を除けば、文芸の種類の中では童話がワイルドの最も長所とする處であろう。小説は「ドリアン・グレイ」の外には価値高きものなく、戯曲も「サロメ」以外には傑出したものがないが、童話は他の作家のものに比して優れてゐる<sup>(10)</sup>

と、特にワイルドの童話を高く評価している。アンデルセンの影響を受け、哀愁を基調とする特別な美の要素が強い芸術童話であると、大塚は指摘している。

本書は大塚保治『文芸思潮論』としてよく紹介されているが、実際には大西克礼編『大塚博士講義集』（第2巻）が国立国会図書館での登録名である。本書の大きな意味は、大学の講義でワイルドが講ぜられたことが、講義集として出版されたことである。大塚保治については、上野直昭「大塚保治博士の思想」（『美学』第4号、1951年）と石崎等「大塚保治」（山田勝編／日本ワイルド協会協力『オスカー・ワイルド事典』（北星堂書店、1997年）がよい参考となる。

### 3 益田道三『近代唯美思潮研究』

昭和16年(1941)の益田道三『近代唯美思潮研究』（昭森社）は、直接ワイルド論を展開させているわけではないが、19世紀のイギリスにおける唯美思潮全体を社会的現象として捉え、芸術至上主義を論じた研究書である。本書の内容については「緒言」に示されている。



英國に於ける「芸術の為の芸術」思想を取扱って最も要領よくまとめた本は、ルイーゼ・ローゼンブラットの『ヴィクトリア女王時代の英文学』に於ける「芸術の為の芸術」である。私は執筆するに當つて、本書に負ふ所が頗る多いけれども、原著は相當大分である所から、私はその主旨を簡叙することにした外、多くの補正や削除を施すと共に、まゝ私見を加へ、且つ章によっては全然書き改めた所もある。(11)

ワイルドについては「第八章 頽廢派と象徴主義」の冒頭で

オスカー・ワイルドは一八八五年以後の英文学に現はれた著しい傾向の一つを代表する者だが、彼の世紀末に於ける文学活動は、一つの孤立した現象ではなく、世紀末の中頃から起つて来た芸術の為めの芸術の發展が彼に於て極まったと解釋すべきである。(12)

と、紹介している。本書で特に注目しておきたいのは、ラスキンとホイッスラーからの影響に関する記述である。ラスキンについては「ラスキンから美への熱意を学んだけれども、芸術至上主義に就いては、師とワイルド等若い学生との間には意見の相違があった」(13)とし、その両極に立つ例としてホイッスラーの「テン・オクロック」を取り上げている。

自然を忠実に模倣してゐるか否かによって絵を判断せむとする傾向に対し、芸術味のない平凡な風景、馬鹿々々しい落日の景といった絵は盲目的に自然を模倣したものとして斥けて、芸術家は自然の色彩や形式を選択して配列するものだと云つた。かくして彼は芸術や芸術家を高揚しながら、芸術の隆興

はその国民乃至時代の社会的道德の高低と比較するといふラスキンの見解やら、時代によってまた社会状況によって、芸術に好都合なものと、そうでないものがあるといふラファエル前派の意見に反対した。(省略) 天才、即ち真の芸術家は、文化の程度や時代の如何を問はず出現するものであって、何れの豫件に従っても美を創造し得る。(14)

ワイルドにとってペイターの影響が最も大きかったとしながらも、ワイルドに大きな感化を与えた人としてホイッスラーが紹介されている。ワイルドの芸術至上主義はラスキンに始まるとしながらも、明治15年(1882)のアメリカ講演「十九世紀英国に於ける文芸復興」でもはっきりするが、アーノルド、スキンバーン、ペイター、ホイッスラー、ゲーテ、ゴッテ、ボオドレル等の思想が反映されていることがわかる。ワイルドへの影響ではホイッスラーを大きく取り上げたことが益田の最大の特徴である。

### エピソード

昭和時代(戦前)のワイルド受容は、本間久雄、大塚保治、益田道三といった研究者が研究分野で大きな成果を上げたことが特徴である。ワイルドをこれまでのようにペイターやラスキンからの影響を単に指摘したのではなく、本間はマハフィ教授や詩「ラヴェンナ」について大きく論じた。大塚は美学者からの立場としてマハフィ教授や詩「ラヴェンナ」というよりは、1877年のイタリア、ギリシャへの旅行がワイルドの美に対する熱情を呼び起こしたことを強く主張した。益田はワイルドにとってペイターの影響が最も大きいと認めながらも、ワイルドに最も感化を与えた人としてホイッスラーを取り上げたのである。こうした指摘が昭和戦前の日本のワイルド研究で行われたことは驚くべきことであろう。

本文では大きく取り上げなかったが、昭和4年(1929)の矢口達『哲人文豪 人生を語る』(教文館)では「ワイルド」を取り上げ、英国唯美主義、「架空の頽廢」、「ドリアン・グレイの畫像」からワイルドを論じ、さらに「ラルタア・ペイタアの批評と作の眞価」、「ワイルドの投獄と文藝対道德問題」を取り上げている。さらに、唯美主義の観点からの研究を見ると、昭和7年(1927)の阪井徳三「自我、観照遊離逃避の芸術——階級芸術としての近代唯美主義」(『早稲田文学』第260号)、昭和12年(1937)に竹林章「近世英国唯美主義の発生的研究(1)～(2)」(『早稲田英文学』第5輯～第6輯)といった一連の研究も発表されていたことを付け加えておきたい。

昭和の戦前時代はワイルドを唯美主義の観点から捉えようとした時代であったと言えるだろう。

## 注

- (1) 本間久雄『英国近世唯美主義の研究』(東京堂、1934年5月)、p. 2.
- (2) Ibid., p. 1.
- (3) Ibid., p. 3.
- (4) 大西克礼編『大塚博士講義集』(第2巻、岩波書店、1936年3月)、p. 196
- (5) Ibid., p. 195
- (6) Ibid., p. 207
- (7) Ibid., p. 209
- (8) Ibid., p. 209
- (9) Ibid., p. 316
- (10) Ibid., p. 332

- (11) 益田道三『近代唯美思潮研究』(昭森社、1941年8月), p. 4
- (12) Ibid., p. 199
- (13) Ibid., p. 202
- (14) Ibid., p. 204

キーワード：ワイルド、本間久雄、大塚保治、益田道三、唯美主義

\* 高橋泰『ワイルド』(研究社、1935)、矢野峰人『近英文藝批評史』(全国書房、1943)、ジャクソン／大塚宣也訳『近代英吉利文学論』(肇書房、1943)については、『日欧比較文化研究』(第4号、2005年10月)で取り上げる予定である。

\* 昭和以前のワイルド受容については、拙著「明治時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第13輯、1999年6月)、「日本のワイルド受容の問題点と展望」(日本英語文化学会編『異文化の諸相』朝日出版社、1999年9月)、「大正時代のワイルド受容」(『武蔵野短期大学研究紀要』第15輯、2001年6月)を参照されたい。

\* 特に内容に支障がない場合には、一部旧字を新字にあらためて引用した。